

第二の誕生日

ラツダ政美

スポーツジムで運動した後、湯船に浸かってまったりしていると、スタッフが私を探しに来た。近所の病院の救急から私に電話があったという。

嫌な予感がある。すぐにスマホから電話をかけたが、なぜか圏外になっていて、なかなかつながらない。

スマホを耳に当てながらとうとう家に着くと、ダイニングテーブルの上に乱れた文字で書かれた夫のメモがあった。

Went to RHH "ER, CHEST PAINS (胸が痛むから病院の救急に行く)

よほど苦しかったのだろう。時刻は午後二時五十分とあった。

病院へ向かうため家を出たところでやっと電話がつながった。電話に出た看護師が早口で言った。

「ご主人の状態が急変し、危ない状態です。どれくらいで来られますか？」

「近所にいるので五分で行きます」と答えた。体が震えた。速歩がいつも間に駆け足になっていた。

病院に到着し救急に入ると、男性の医師がベッドに横たわった夫の胸を押しているのが見えた。蘇生処置が行なわれている最中だった。それを見た瞬間、私は「キャー」と叫び座り込んでしまった。すぐに女性の看護師が向かいの部屋に私を連れて行った。

そこで「こんな別れ方は嫌だ」「戻って来てー」と心の中で叫んだ。多分声にも出してもいたのだろう。ブツブツ言っていると、説明にやって来た医師はそんな私のように見えて、「今話をしてもダメだね」と言って去って行ったそう。

その間、私を別室に連れてってくれた看護師は、私の横で立ったままずっと肩を撫でてくれていた。そして泣いて話せない私の代わりに息子を電話で呼んでくれた。

私は「彼を連れて行かないで」「私の命を縮めても良いので彼にあげて」と祈りながら呟いていた。人生でこんなに強く、長く、激しく祈ったことはなかった。

当時専門学校生の息子もアルバイト先からタクシーに乗って駆けつけて来た。動転している私と違い、彼は静かに言った。

「父さんは強い人だから大丈夫。戦士だよ」

そう言いながら私の背中をずつとさすってくれた。日頃頼りないと思っていた我が息子は、この時本当にたくましくみえた。

第二の誕生日

夫は近所の病院の救急に駆け込み、検査中に私のいるスポーツジムの電話番号を告げてから意識不明になったそう。病院の救急スタッフは、激しい心室細動の状態からの夫の蘇生を行なった。幸いにもスタッフの献身の蘇生で、四回目の電気ショックの後、心拍が正常に戻った。三十分もかかったそう。

すぐに詰まっている冠動脈にステントを留置する手術も行われた。手術は成功した。蘇生中に途絶えることなく脳にも酸素補給が行われたことが幸いし、脳へのダメージもなかった。

夫は生還したのだ。

手術後、集中治療室でさまざまなチューブに繋がれている夫と面会できた。口から喉にかけてチューブが入っているので話はできないが、筆談ができた。アメリカ人で日本語がわからず、何が起きているのか当惑している夫に、これまで起こった蘇生のこと、手術のことを説明した。急性心筋梗塞を起こしていたのだ。

それから集中治療室を出て荷物を取りに家族控室に入ると、突然息子が大声で泣き出した。母が取り乱していたので、ずっと泣きたい気持ちを抑えていたのだ。かわいそうに。彼もどれだけ怖かっただろう。

翌日夫と話ができるようになり、彼の視点から何が起こったのか聞くことができた。夫は自宅で昼食を食べた後、胸の痛みを覚えた。さらに冷房が効いているにも関わらず、異常なほど汗も出てきたそう。そこで歩いて十五分ほどの病院に向かった。

途中、胸の痛さと苦しさで、何度も途中で座り込みたい気持ちになったが、ここで座り込んだらもう立ち上がれず、病院にもたどりつけないだろうと思い、自身を鼓舞しながら歩き続けたそう。

主治医によると、路上でそのまま倒れていたら、万一素人によって蘇生処置が行われていたとしても、脳に酸素を送る処置は行われないから脳へのダメージがあり、後遺症として残っただろうということだった。

夫は何とか病院にたどり着き、「アイム ゴーイング」と言って意識を失った。蘇生中は電気ショックで何度か目覚めたが、その度に「家族を残してこのままでは逝けない。何とか生きなければ……」と自分に念じていたそう。

夫は息子が言ったように戦士だった。生きて戻って来てくれてありがとう！

七年前の九月十八日のことだった。それ以来、我が家では六月の彼の誕生日の他に、この再生の日も第二の誕生日として祝っている。